

第4回 国際フォーラム

く食べて、歌って、話し合う、ひろのいろいろ会議く

「被災地からの メッセージ」

広野町

2017年10月12日(木)～15日(日)
[報告書]

International Forum "Message from Disaster Affected Areas"

 福島県広野町

主 催／広野町
共 催／学校法人昌平覺 東日本国際大学／学校法人 熊本学園大学／東京大学アイソトープ総合センター
株式会社 Jヴィレッジ／檜葉町／葛尾村
後 援／復興庁 福島復興局／福島県／国立大学法人 福島大学／(一社)日本童謡協会

CONTENTS ◎目次

■ はじめに	01
■ プログラム	02
■ 『被災地からのメッセージ』	03
■ 開会式	05
■ 各セッション	09
■ 国際フォーラム関連新聞記事	22

はじめに

平成29年10月12日(木)から15日(日)にかけて、『第4回国際フォーラム ～食べて、歌って、話し合う、ひろのいろいろ会議～「被災地からのメッセージ」』を開催しました。

開催に際しては、平成28年11月に発信した国際フォーラム「被災地から考える」のメッセージを受け、地域間連携による課題の解決、被災地からの情報発信という観点はそのままに、新たに地域の魅力の再発見を主題として、他市町村・関係団体・学校機関を巻き込んだ話し合いを行いました。

期間中は、交流イベント等を含めた20のセッションにおいて、延べ約800名のご参加をいただき、広く双葉地域や福島県を視野に置きつつ、広野町における将来展望を、町民や来場者の皆様を交えて議論しました。

その結果、最終日には参加者の総意としてメッセージを発表することが出来ました。



PROGRAM ◎プログラム

10/12
[THU]

- 開会式
- 基調講演「エジプト発掘の魅力」
- セッション1「廃炉について語り合う」
- セッション2「わかりやすい鳥獣被害対策～野生鳥獣の生態と被害対策～」
- 呈茶席

10/13
[FRI]

- セッション3「浜通りの魅力とサイクリング観光」
- セッション4「童謡のまち 広野 ～童謡 心の復興～」
- いわき学園食品販売

10/14
[SAT]

- セッション5「Jヴィレッジ『サッカーとまちづくり』」
- ワークセンターさくら食品販売

10/15
[SUN]

- セッション6「広野中学生海外研修報告会 ～異文化体験を通して～」
- セッション7「短寿命α線核種を用いた新しい治療薬開発の現状と展望」
- セッション8「われわれの復興とは何か？ 6年半の経過から復興について考える」
- セッション9・10「未来創造探究 研究発表・演劇『あのひ、隠れたひ』」
- 健康食じゅうねんうどん試食会
- ふたば未来学園高等学校 農業・商業実習販売

常設

- 広野町映像作品放映
- 広野町の放射線情報
- 恐竜化石展



第4回 国際フォーラム メッセージ

今年で4回目となる国際フォーラムは、「被災地からのメッセージ」～食べて、歌って、話し合う、ひろのいろいろ会議～と題して、被災地における風評被害の払拭や地域文化の再興、地域の魅力の再発見など、10月12日から10月15日までの4日間に、12のセッションと8つのサイドイベント、交流イベントを実施し、“食べる”、“歌う”、“話し合う”の各テーマに沿った視点から、様々な課題について話し合った。

- 1) いまだ多くの避難者がいる一方で、津波により被災した沿岸部の復旧が進み、新たな道路や施設が開設されるなど、日常を取り戻しているかに見える。しかし、この地域は今後、数十年を要すると言われていた原発の廃炉と向き合い、付き合っていかなければならない現実にも直面している。廃炉作業の行程の透明性と、住民との対話が無くしては、地域を再生することはできない。今回も含め、不安を払拭するための議論の継続を、地域の未来を切り拓く土台としなければならない。
- 2) 第23回を迎えた「ひろの童謡まつり」と初めて同時開催し、本年に当町が受賞した「童謡文化賞」や来年迎える童謡誕生百年に華を添えた。東日本大震災と原子力災害から6年半が経過し、昨年の国際フォーラムでは、被災住民の「心の復興」が求められているとの課題が挙げられている。童謡は広野町が「とんぼのめがね」のふるさととして、長年継続して取り組んできた文化であり、童謡の持つ癒やしに、「心の復興」への大きな期待がよせられる。
- 3) 2020年の東京オリンピックを見据えた中で、サッカーのナショナルトレーニングセンター「Jヴィレッジ」の再オープンが行われようとしている。地域再生の起爆剤として大いに期待されている施設であるが、どのように再生を成し得ていくかが重大な関心となっている。地域からのニーズや施設の役割、目指すべき目標などをどこに置か、「ふくしま」、「ふたば」の広域的な議論へ繋げるきっかけとなる話し合いができた。今後は、地域の活動と相互に連携する取り組みへと進めていきたい。
- 4) 風評被害の払拭は、地域が抱える大きな課題の一つである。テーマの“食べる”では、多くの来場者に地元食材を使用した「じゅうねんうどん」を試食してもらった。実りの秋をむかえた田んぼでは、今まさにたわわに実った稲穂が頭をたれ、刈り取りを待っている。今年は、富岡町でも震災後初となる作付けが行われ、農家が喜びの声をあげた報道がなされている。被災地福島への関心が薄れていく中で、風評被害は根強く残ったままだ。地道で確実な一歩の積み重ねが、問題解決の近道である。私たちは、その歩みを止めてはならない。
- 5) 広野町は震災前の生活を取り戻すため、放射線影響から「いのちを守る」ことに細心の注意を払っている。一方で、2人に1人ががん患者となる今日、半減期が短く(短寿命)、β線やγ線と比べて細胞致死効果の強いα線を放射する核種を使った治療薬の有用性が確認されて、国際的開発が急速に進展している。今回、α線核種製造、ドラッグデリバリーシステム開発、自動化装置開発など、必要とされる技術の全体像が

示された。我が国において関連する技術やヒトの集積地となり、世界をリードする短寿命 α 線内用療法開発拠点となることによって、広野町が「いのちを守る」活動を通じて、「人を活かし、未来をつくる町」として大きく復興する可能性を持っていることが示された。

- 6) 被災地から何を発信するか、外部からの視点で当地域を見てもらう取り組みは、国際フォーラム始まって以来の共通認識である。今年も、南相馬市と川内村、広野町が参加して、都会のクリエイターの卵たちによるPR動画を製作した。新しい魅力の発見や映像が持つ無限の可能性に驚きと感動を覚えた。また、ふたば未来学園高校が行っている演劇も、芸術鑑賞の観点から地域の課題や現状を発信し続けている。実際に被災地へ足を運んでもらい、体験し、ふれあう活動や取り組みが最も重要である。

以上の教訓から、被災地がそれぞれの自治体ごとにあっていた課題対応について、地域間での情報共有や広域的な連携を深め、一步一步確実に解決することが必要である。「被災地からのメッセージ」は、被災地の現状を知ってもらう重要な手段であることから、今後も適切に発信し続けなければならない。

平成29年10月15日

国際フォーラム「被災地からのメッセージ」

参加者一同



開会式

日時	平成29年10月12日(木)11:00～12:30
場所	広野町公民館(大会議室)
司会	小松 和真(広野町復興企画課)
ご来賓	復興庁福島復興局 局長 横山 忠弘 様 原子力災害現地対策本部 副本部長 須藤 治 様 福島県相双振興局 局長 佐々木 秀三 様 双葉地方町村会長 松本 幸英 様 広野町議会副議長 北郷 幹夫 様
参加者	約130名



1 主催者あいさつ



広野町長
遠藤 智氏

被災から6年と半年の星霜を刻んで参りました広野町ですが、故郷の復興に向けて、どのように取り組んでいけばよいのか、それを知る1つのきっかけとして、平成26年は国際シンポジウムという形で、平成27年から本年にいたるまでは国際フォーラムとして開催してきました。

被災地から何を為すのか。風評・風化の2つの風に立ち向かうため、正しい情報の発信が何よりも重要であります。4年目となる本年においては、広野町帰還の春を迎えてから、復旧から復興、復興から創生への道のりを、被災地の皆様と歩んでいく。その姿を伝えていきたいという思いから、「被災地からのメッセージ」と題してフォーラムを開催いたしました。

広野町は本年、馬場医院の開院、復興公営住宅の完成、未来のかけはし開通など、復興への一步を確実に進めて参りました。教育においては東日本国際大学、早稲田大学、福島高専の3つの高等教育機関のサテライトオフィス、二ツ沼パークギャラリーに設置する運びとなりました。

これから私たちが向かっていく先、未来に見えるのは、常磐線の全線開通、Jヴィレッジの本格再開、ふたば未来学園中高一貫校の開校、認定こども園による幼保一元化。これらの実現に向けて、一步ずつ確実に準備を進めているところでございます。

わたしたちは、この国際フォーラムの開催を通して、広野町が掲げる「命を守り、人を活かし、未来をつくる町」の実現に向けて取り組んで参ります。命を守るとは、医療福祉のみならず、健康にかかわる放射線知識の正しい普及を意味します。人を活かすとは、町内外の交流を活発化する、この国際フォーラムもその1つであります。未来をつくるとは、ふるさと伝統文化風習を守り育て、未来に継承する責任を果たすということです。

この国際フォーラムが皆様にとって実りのあるものとして終えられるよう、また、次年度以降に向けて続けていけるよう願っております。

2 ご来賓あいさつ



復興庁福島復興局長
横山 忠弘氏

広野町の第4回国際フォーラムがこのように盛大に開催されることを心より喜び申し上げます。また、お集まりの皆様方においては、常日頃より連携・協力いただき、復興に向けてご尽力をいただいていること、敬意を表します。

大震災から6年と半年が過ぎ、広野町においては平成24年3月に役場を町内に戻し、公共インフラの復旧、住民帰町に向けて取り組んでこられたと認識しております。その成果として、災害公営住宅、商業施設、駅周辺の整備が着々と進み、その効果として町民4000人、被災前の8割にあたる帰町となり、大変喜ばしいことと思えます。

そんな中、国際フォーラムの開催にあたり、地域文化・観光交流・復興さまざまな分野における議論・交流がこの4日間活発に進められていくことを期待するとともに、このフォーラムの成果が復興創生の一助となり、被災地の中で地域の宝の再発見・発信に繋がればと願っております。

私たち福島復興局としても、被災地の復興創生が一層加速化されるよう、皆様方と手を取り合いながら取り組んで参りたいと思っておりますので、なにとぞよろしく願いいたします。



原子力災害現地対策本部 副本部長
須藤 治氏

広野町の復興の歩み、見てまいりますと、帰町率は8割を超え、駅の東には集合住宅が建ち、次々と入居者が決まり、岩沢の工業団地には企業進出がなされ、そして今日お越しの東日本国際大学をはじめとして早稲田大学、福島高専など高等教育機関との連携も進み、復興の歩みが着実に前へ進んでいることを感じます。これは遠藤町長はじめ、町、議会の皆様のご

尽力によるものと思っております。そのことに敬意を表します。

われわれ現地対策本部としましても、復興庁はじめ国の諸機関との連携をはかりながら、広野町の皆様のご努力を、精一杯応援してまいりたいと思っております。

さて、国際フォーラムのプログラムを見ておりますと、本当にわくわくしてまいります。身近な話題、大切な話題、そして何より楽しみなのは、未来を担う中学生・高校生たちの発表・報告があることでございます。こうしたフォーラムが広野町の力強い復興の一助になることを確信しております。



福島県相双地方振興局 局長
佐々木 秀三氏

東日本大震災から6年7か月が経過いたしました。この間、広野町においてはいち早くインフラの復旧、公設商業施設「ひろのてらす」の開設、広野駅周辺の開発など、町内の生活環境の整備が進められて参りました。また、早稲田大学や東日本国際大学などの高等教育との連携、Jヴィレッジの再開への取り組みなど、これからの復興再生に向けた動きに力強さが増

して参りました。

これはひとえに、先頭で指揮をとられてきた遠藤町長はじめ、町の議会・職員の皆様、復興事業に携わってこられた関係者の皆様、そして町民の皆様のご努力・ご労苦の成果であり、改めて敬意を表します。

今回4回目の開催となるこの国際フォーラムは、広野町と双葉郡の将来を想像し、現状の課題解決や気づきを得ること、正確な情報を国内外に発信することを目的に、さまざまな分野の専門家が集まり、行われてきております。こうした被災地の課題解決に向けた議論や、地域資源を生かした交流機会の創出に、広野町が率先して取り組まれていることに感謝を申し上げます。県といたしましても、今後も国・地元市町村と連携し、被災地の復興再生に全力で取り組んで参りますので、皆様方の引き続きのお力添えをお願い申し上げます。



双葉地方町村会長
松本 幸英氏

東日本大震災及び福島第一原子力発電所の事故から6年と7か月が経過しましたが、双葉郡の住民の多くはいまだに県内外に避難し、不慣れな土地での避難生活を余儀なくされております。そのような中にあり、広野町をはじめとする双葉郡内の一部の町村におきましては、復旧・復興や住民の帰還が、徐々にではありますが進んでおります。

本年3月31日には浪江町が、4月1日には富岡町が、帰還困難区域を除いてそれぞれ避難指示が解除され、本格的な復旧・復興に向けて、様々な課題に取り組んでいるところでございます。

しかしながら、一つの町村でできることには限界がありますので、広野町をはじめとして郡内町村と連携を図りながら普及・復興へ邁進していきたいと考えております。

本日より開催されるこの国際フォーラムを通じて、今の広野町・双葉郡を知っていただくとともに、風評被害の払拭や地域文化の継承など、各町村が抱える課題の解決のきっかけとなることを、心から願っているところでございます。我々双葉郡の8町村は被災前の豊かな自然、子供からお年寄りまで笑顔あふれる「ふるさと」双葉を必ず復興するという強い決意のもと、明るい双葉郡の未来を思い描きながら、今後も国・県の皆様とともに復旧・復興に取り組んで参りますので、本日お集まりの皆様のご支援と、ご理解を賜りますよう心からお願いをする次第です。



広野町議会副議長
北郷 幹夫氏

国際フォーラムの開催も第4回を迎え、昨年の国際フォーラムでは、参加された一人一人の広野町に対する熱い思いが感じられ、有意義であり、かつ大変心強く感じられました。今回も、広野町更には双葉郡が考えるべきさまざまな課題について、活発なご意見とご審議をお願い申し上げます。

議会といたしましても、町の復興そして再生が一日でも早くはかれるよう、行政とともに取り組んでおります。

今回フォーラムに参加されております研究者・学生・住民の皆様におかれましては、町の復興再生への知恵をご教授くださるようご期待申し上げます。また、ご多忙の中このフォーラムにご出席いただいた関係各位の皆様方に、厚く御礼を申し上げますとともに、この国際フォーラムが広野町のみならず、被災地、双葉郡の復興にとって有意義なものとなりますよう心からお祈り申し上げます。

3 ご臨席

◎大熊町いわき出張所 所長 澤原 寛氏
◎学校法人 昌平塾 理事長 緑川 浩司氏
◎広野町議会議員 門馬 巧氏
◎広野町議会議員 遠藤 浩氏

◎富岡町 副町長 高橋 浩一氏
◎広野町議会議員 塩 史子氏
◎広野町議会議員 門馬 まりえ氏
◎広野町議会議員 北郷 伯弘氏

◎オープニングセッション／基調講演

エジプト発掘の魅力

日時	平成29年10月12日(木)11:00～12:30
場所	広野町公民館(大会議室)
講師	吉村 作治(東日本国際大学)
参加者	約120名



1 概要

1. 第1部／エジプト発見の魅力

エジプト研究を通し、海外に長年携わってきたことで、日本と海外の文化、歴史、宗教などの繋がりや違いについて知識を広げることができたことを述べ、ふたば未来学園をはじめ、多くの若者が海外に出る機会を設けることが必要であると提言した。

2. 第2部／エジプト発掘の魅力

エジプト発掘を志すきっかけとなった子供時代の経験「伝記 ツタンカーメン王の秘密」との出会いや、最初のエジプト訪問までの苦労、電磁波探査レーダーの使用により多くの遺跡、太陽の船を発見するまでの経緯を語った。そのほか古代エジプトの文化について解釈を交えながら、発掘の成果物を紹介した。

2 クロージング(まとめ)

広野町では、平成26年6月に東日本国際大学と地域連携協定を締結し、今年7月に東日本国際大学の広野センター及び福島復興創世研究所が開所されたことから、吉村学長の基調講演が実現した。

平日の開催ながら、会場には溢れんばかりの参加者が押し寄せ、未だ謎に包まれているエジプト発掘の魅力に夢や可能性を感じていた。



また、教育において、グローバル人材の育成とは、世界を視野に地域研究を行うことであり、自国の文化を他に伝える事が出来るということだと述べ、若者が積極的に海外に出る事へのメッセージを伝えた。

◎セッション1

廃炉について語り合う

日時	平成29年10月12日(木)13:30～15:00
場所	広野町公民館(大会議室)
講師	山名 元(NDF-原子力損害賠償・廃炉等支援機構)
参加者	約100名



1 概要

1. 第1部／福島第一原子力発電所の現状

動画を通して、事故当時から現在に至るまでの経緯を説明した。

2. 第2部／廃炉に向けた取り組み

- ① 福島第一発電所における廃炉が一般的な廃炉と何が違うのか対比を行い説明した。
- ② 政府や東京電力、原子力損害賠償・廃炉等支援機構(NDF)などによる廃炉に向けた役割・体制を説明した。
NDFは、政府が示す廃炉に向けた指針に基づき東京電力が実施する取り組みを支援するための組織であることを説明した。
- ③ 廃炉の課題は、リスクを継続的かつ速やかに低減することで、短期的には汚染水対策と使用済み燃料の取り出しをしなければならないこと、中長期的には燃料デブリを取り出し、より安定的な状態にしなければならないことを確認した。
- ④ 地下水バイパス・フェイシング・サブドレン・凍土壁をはじめとする汚染水対策について説明したほか、原子炉格納容器・圧力容器の構造や燃料デブリとは何かについて分かりやすく説明を行った。

3. 第3部／福島第一廃炉国際フォーラムの報告

地域の皆様と廃炉について情報共有するための取り組みとして7月に開催した第2回福島第一廃炉国際フォーラムについて説明した。

フォーラムに先立ち実施した座談会などで得た意見や疑問をまとめた冊子「ぼいすふろむふくしま」を来場者全員に共有した。

2 クロージング(まとめ)

- ・ 今後は廃炉に向けたプロジェクトマネジメントが重要となり、プロジェクトを推進するためにも地域の皆様との情報の共有が重要となる。
- ・ 平成30年には楡葉町コミュニティーセンターで福島第一廃炉国際フォーラムを開催する予定なので、是非、ご参加いただきたい。
- ・ 本セッションの成果として、国際フォーラムを通して、廃炉に向けた取り組みに関する地域の皆様のご理解が一層深まっていただけと思われる。
- ・ 地域の皆様と一層のコミュニケーションを構築できるよう、このようなフォーラムなどの場に積極的に参加してまいりたい。

◎セッション2

わかりやすい鳥獣被害対策

日時	平成29年10月12日(木)15:00～16:30
場所	広野町公民館(小会議室)
講演者	井出 忠行(相双農林事務所双葉農業普及所) 小野 司(農業総合センター浜地域農業再生研究センター)
参加者	約20名



1 概要

1. 第1部／鳥獣の生態(小野)

福島県において農作物に被害をもたらしているイノシシ、ツキノワグマ、ニホンジカ、ハクビシン、アライグマ、タヌキについて、体長・知能・視力・食性などの能力や性質を、動画等を使いながら説明した。

2. 第2部／鳥獣への対策(井出)

5つのポイント①近づけさせない②餌場をなくす③囲って守る④捕獲する⑤集落ぐるみの体制作りを徹底することで鳥獣にとって“魅力的ではない”環境構築をする方法を提示した。

2 クロージング(まとめ)

鳥獣による農作物被害を防止するためには

- ①対策する相手を特定、その生態を知る(相手を知る)
- ②被害区域とその程度を点検する(自分を知る)
- ③野菜くず、果樹の適正処理(餌を与えない)
- ④柵の設置、耕作放棄地の解消、緩衝地帯の整備(守る)
- ⑤ハンターとの協力(攻める)

の5つのステップで対策を図ることが重要である。

地域農業者・住民が協力しあいながら対策を進めていくことが肝要であることを確認した。

◎セッション3

浜通りの魅力とサイクリング観光

日時	平成29年10月13日(金)10:30～12:00
場所	広野町公民館(大会議室)
コーディネーター	野田 雅之(南会津サポートクラブ)
パネリスト	佐藤 和也(広野町)、鯨岡 大輝(檜葉町) 島 崇徳(葛尾村)
参加者	30名



1 概要

1. 第1部／サイクリング観光を考える(南会津)

南会津地域でサイクリングを通じた観光・地域振興に取り組んでいる野田 雅之氏が、継続して開催できる、地域に根差したサイクリング観光実施の要点(目的・地域特性・継続性・広告)を説明した。

2. 第2部／サイクリング参加者の視点から(広野)

昨年開催の「檜葉・広野紅葉サイクリング」に、参加者として関わった際の感想を述べた。「普段気づかない季節の風を感じることができる」と佐藤氏。

3. 第3部／復興とサイクリング(檜葉)

震災・原子力災害で断ち切られた人と人のつながりを取り戻すため、若者からお年寄りまで楽しめるような、新たな交流の場としてのサイクリングを紹介した。

4. 第2部／地域づくりとしてのサイクリング(葛尾)

村外の意見を取り入れて魅力発信・交流&帰村人口の拡大に取り組む、かつらおサークルミーティングと、地域の魅力発信のための大規模サイクリングイベント「ツール・ド・かつらお」を紹介した。

2 クロージング(まとめ)

サイクリングの素地がない浜通り地域において、本セッションの参加者が集まるかと危惧されたが、当日は会場の9割が埋まり、公演中も資料を手に持ち熱心に聴講する参加者がみられるなど、予想以上の成果を得られた。

また、各地のマスコットキャラクターである ひろぼー、ゆず太郎、しみちゃんの登場に会場は大盛り上がりだった。

ただの興味で終わらない、「参加したい」という意欲をアンケートで述べるなど、参加者の心に響く講演となった。

講演者・聴講者両サイドから「さらに広い地域で連携して取り組んでどうか」という意見が出るなど、広域連携が今後の課題として示唆された。

◎セッション4

童謡のまち 広野 ～童謡 心の復興～

日時	平成29年10月13日(金)13:30～15:00
場所	広野町公民館(大会議室)
講演者	伊藤 幹翁(作曲家、日本童謡協会 常任理事)
登壇者	伊藤 幹翁(作曲家、日本童謡協会 常任理事) 谷平 克二(童謡のまちづくり実行委員会 実行委員長) 関根 結衣佳(東日本国際大学、童謡のまちづくり実行委員会 委員) 中津 弘文(広野町復興企画課 課長)
ファシリテーター	阿部加奈子(広野町復興企画課)
参加者	50名



1 概要

1. 第1部／伊藤 幹翁 氏 講演

大正7年(1918)に児童文学誌「赤い鳥」が創刊された。来年度で童謡誕生100周年を迎えるにあたり、童謡の素晴らしさを伝えたい。

童謡は「ありがとう」や「愛してる」を直に言わない。また、「夢は叶うよ」と呼びかけるスローガンソングのようなものでもない。

「赤い鳥小鳥」(北原白秋)は“人間も、見るもの、食べるもので影響を受けてしまう”ことを暗示している。

「かなりや」(西条八十)は“どんな状況でも環境次第で、改善される場合もある”という希望を表し、いじめ問題にも通じている。

「ぞうさん」(まどみちお)は、親子のDNA関係を表しており、親から子に受け継いだ長い鼻も“無駄なものはない”という本質を教えている。

童謡はダイレクトに伝えないため分かりにくいのが、歌詩には必ずメッセージが込められている。

広野町は新しい童謡を生み出している。この取り組みは素晴らしい。全国自治体で童謡作詩コンクールを行っているのは兵庫県たつの市と広野町だけ。子ども達の情操教育として一緒に育てて行って欲しい。

2. 第2部／フリーディスカッション「広野町と童謡について」

Q. 長年童謡まつりに出演いただいている中で、その魅力とは何か。

伊藤) 広野の詩は面白く、曲も良い。平成の財産。ここで生まれた曲は良いものが多い。童謡誕生100年、そしてこれからの100年をどのように大事にしていくか。“平成の赤い鳥運動”として、たつの市、広野町の童謡を広めていきたい。

Q. 童謡のまちづくり実行委員として長年携わる中で、童謡のまち広野をどのように思っているか。

谷平) 童謡まつりをもう少し盛り上げたい。また、もっと住民の参加をして欲しい。「継続は力なり」なので、継続して頑張っていきたい。

Q. 若い世代はどのように童謡と関わってきたか。

関根) 中学生のときの先生が童謡、地域に根ざしたものを積極的に授業で歌わせてくれた。ただ、個人的には、もう少し童謡に触れ合う機会が欲しかった。今時の曲の方が良いという意見もあるが、童謡は心のよりどころとなるのではないか。

Q. 第1回童謡まつりの立ち上げから携わり、当時の想いや今の想いについて。

中津)「文化の香るまちづくりが出来ないか」との教育的な視点から童謡まつりを始めた。当時は手探りの状況、町民総参加で作りに上げてきた。ただ、近年はマンネリ化していないか。変わることが良いとも思えないが、本当にこれで良いのか。

Q. どのように童謡まつりをPRすれば良いか？

- ・多くの意見を聞き入れてしまい平均的なものになってしまっているのではないか。例えば、特定の人を中心としたプロデュース制にしてはどうか。
- ・スタートは行政主導であっても、住民主体で盛り上げる構図が望ましいのでは。
- ・今の実行委員会の在り方では単独で進めることは難しい。ある程度、行政が引っ張っていき、道を作ることも必要ではないか。
- ・毎年、実行委員は同じ顔ぶれになってしまっている。そこを直せばもっと良いものになる。
- ・実行委員会に加わったきっかけは「知りたい」と思った興味から。歌がこんなに人の支えになるのかと分かった。
- ・目に見えた復興はなされているが、心に負った傷が大きいのでは。それを癒やすのが行政の課題。祭・地域の伝統文化・童謡まつりを地域一体となって展開していきたい。
- ・世界の国で、子どものためにこんなにたくさんの歌を作っている国はない。それは日本語の美しさ、考え方があるのかもしれない。歌は、悲しいとき、寂しいときに必要。

3. 第3部／質疑応答

会場からは、「童謡サミット」の開催について質問があり、童謡サミットは、富山県を最後に現在は行われていない。規模が大きくなりすぎてしまったことから行政側での予算の問題や個人情報の規制等も問題がある。来年度童謡誕生100年の年なので、同時開催は難しいがまた再開したいと伊藤氏より回答があった。

2 クロージング(まとめ)

- ・童謡について語る本セッションは初の試みであり、町民にとって、「童謡まつり」は定着しているが、それ以外で童謡と触れる機会が少なく、そのことが興味や実行委員会への参加が少ない要因の一つとなっている。
- ・伊藤氏の講演で童謡の隠された真実や奥深さを知り、童謡の魅力を再確認することが出来た。また、フリーディスカッションでは、出演者、委員、行政各立場から童謡まつりの現状や開催の難しさ、各々の想いを参加者に伝えることができた。
- ・童謡誕生100年を来年に控え、今回のセッションを設けたことは大変有意義であった。今回出された意見については、来年度の童謡まつりに活かし、「童謡のまち ひろの」のさらなるPRを図るとともに、広野町における文化の継承に努めたい。



◎セッション5

Jヴィレッジ「サッカーと町づくり」

日時	平成29年10月14日(土)10:00～12:00
場所	広野町公民館(大会議室)
コーディネーター	島崎 延雄 (うつくしまふくしま未来支援センター 相双地域支援サテライト)
パネリスト	小野 俊介(株式会社Jヴィレッジ)、佐藤 和也(広野町) 松本 昌弘(楢葉町)
参加者	20名



1 概要

1. 第1部／「Jヴィレッジ再生と地域の関わりについて」

(Jヴィレッジ小野)

営業から15年が経過し、被災からの復興、地域振興に向けて話をしたい。

Jヴィレッジが再開した、と言える最終目標は全国少年サッカー大会をここで開催すること。再来年(2019年)には5件ほど相談が来ている。

Jリーグのシーズン制見直し(春→秋から秋→春へ)計画があるが、これが実現した際にはJヴィレッジの全天候型練習場が注目を浴びるだろう。

日本代表をはじめとするプロレベルから、町民をはじめとする一般利用客まで、広く利用してもらえることが施設のコンセプトで、これは依然変わっていない。新たな取り組みとして、他スポーツでの利用や集客のある音楽イベントの開催場所として利用することも考えられる。

2. 第2部／「町とのかかわりについて」

(楢葉町 松本)

Jヴィレッジは自分にとって地元の身近な施設だった。平成14年のアルゼンチン代表合宿の際には地域全体が大いに盛り上がった。友達のおばあちゃんがレシートの上にサインをもらっていた。

自分は身近に感じていたけれど、高齢者等スポーツから遠い人だと敷居が高かったかもしれない。これについては、被災後の仮設住宅でフィットネスクラブがオープンするなど、新しい関わり方が生まれたのが良かった。

JFAアカデミーや女子日本代表候補が身近にいることで、子供のころの、自分の漠然とした将来観には刺激になった。Jヴィレッジは、地域から外へ開かれた窓だと思う。

将来的に、町民が集まる運動会のようなイベントや、町対抗サッカー大会とかリーグとか、地域に開かれた、住民に夢を与える施設になってほしいと思う。

(広野町 佐藤)

広野町との関わりということ、楢葉町と同じく、平成14年にアルゼンチンのベースキャンプ地になったことは大きかった。ポルトガル教室やパブリックビューイングをやったことが、Jヴィレと町民が近づいた出来事。サッカー教室や水泳教室もやっていた。

職場に入り、Jヴィレのイベント、サッカー大会をお手伝いしたり、TEPCOマリーゼの手伝いをしたこともあったが、

そのとき双葉が1つになったということを記憶している。

職場内でJヴィレのロゴを使ってポロシャツを作り、その売り上げを一部寄付しようという計画もある。Jヴィレと町の距離が近づくような取り組みを増やしたいと思っている。

広野は、JFAアカデミーの男子寮があった。広野中出身で世界に羽ばたく選手が生まれるということも大切。

3. 第2部／「町民との意見交換」

(島崎)

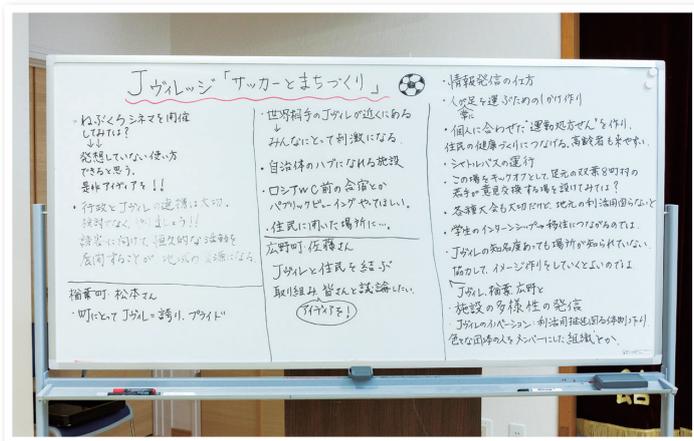
- ・スポーツだけではなく、いかに付加価値を加えていくかが重要
- ・フィットネス教室に個別性がないのでは。個人に合わせた運動処方箋を作る活動をしてはどうか。そうすれば、年代の高い人も通いたくなるかもしれない。
- ・車がつかえない人でも利用できるよう、バスを走らせられないか。
- ・町としてもJヴィレッジにおけるようなおみやげを要してはどうか。
- ・Jヴィレッジを職業体験の場としてインターン等受け入れてみては、Jヴィレッジがより開けた施設になり、移住につながるケースも考えられる。
- ・県外だと、Jヴィレッジという施設は知っているけどどこにあるのか知らないというケースがある。町が前に出るような連携はとれないか。
- ・「いろいろな使い方ができますよ」ということを発信することが、次の多目的使用に繋がる。

2 クロージング(まとめ)

Jヴィレッジの利益獲得と交流人口拡大は相反するものではない。同じ方向性だ。住民目線からは交流人口を、Jヴィレッジ側からは利益獲得をめざし、何ができるか話し合い、作り上げていく。

Jヴィレッジはシンボリック的存在であり、地域のハブになりうる場所。スポーツだけではなく、文化・芸術にもかかわっていくことが出来る。

地域の復興・Jヴィレッジの再盛という果実を目指して、課題を洗い出し、1つ1つ対応していきたい。



◎セッション6

広野中学生海外研修報告会 ～異文化体験を通して～

日時	平成29年10月15日(日)9:00～11:00
場所	広野町公民館(大会議室)
ファシリテーター	藤本 正樹(株式会社グローバルアース)
発表者	広野中学2年生一同
参加者	20名



1 概要

1. 第1部／研修内容の紹介

現地の日本人農家「オギファーム」での農業体験、ホストファミリーとの出会い、カナディアンバディ(現地サポーター)との英語でのコミュニケーションなど、研修で実施したイベントについて説明した。

2. 第2部／中学生と留学生の意見交換

グループディスカッション形式で、留学生の国々と日本の違い(Lv1)

他国との交流からこれからの日本に活かせること(Lv2)について話し合いを行った。

3. 第3部／研修を通して変化した考え方を発表

訪問先であるカナダの食・気候・文化・自然そして現地の人柄について感じたことを発表し、日本との違い・共通点を述べた。

4. 第4部／発表後質疑応答

Q. カナダとの大きな違いとして自動販売機がないことを挙げたが、その理由は何だと思うか

A. 景観への配慮? 犯罪対策かも

Q. カナダと日本のライフスタイルではどちらが好きか

A. 家族同士の中の良さ(カナダ)、自分の時間をとれる(日本)

Q. 違う宗教の人と仲良くなれるか

A. 違いを自分の学びにしたい

Q. コミュニケーションで困ったことは

A. 英語という慣れない言葉に囲まれたこと

2 クロージング(まとめ)

広野中学の生徒たちが学校外に向けて自分の体験を発表する良い機会になったとともに、改めて留学生との話し合いを通して自国と他国の違いと良さについて考えを深めることが出来た。

◎セッション7

短寿命 α 線核種を用いた新しい治療薬開発の現状と展望

日時 平成29年10月15日(日)10:00~12:00

場所 広野町中央体育館(ミーティングルーム)

コーディネーター 和田 洋一郎(東京大学アイソトープ総合センター)

パネリスト 杉山 暁(東京大学アイソトープ総合センター)

久下 裕司(北海道大学アイソトープ総合センター)

織内 昇(福島県立医科大学)

土屋 正年(ヤマト科学株式会社)

加藤 太輔(ヤマト科学株式会社)

参加者 25名



1 概要

1. 第1部/ α 線医薬品におけるドラッグデリバリーシステム(杉山)

がん治療において、抗がん剤の投与は、そのほかの健康な細胞にも影響を与えるため、必要部位のみに絞った投与・治療が望ましい。そのために、標的のみに薬を届ける仕組み(ドラッグデリバリーシステム)を用いたがん治療が存在する。 α 線、 β 線、 γ 線、中性子線の中で α 線は最も透過性が低く紙一枚で遮蔽できる。しかし、 α 線は大きなエネルギーをもつためスパイラル形状を為すDNA2本ともを破壊でき、がん細胞へ致命的なダメージを与えることができる。このことから近年 α 線のがんを治療する方法が注目されている。

がんを抗原として認識する抗体分子に放射線核種を付帯させ、治療部位に送るが、この際、攻撃性の高い放射性物質が全身で長期間循環することを防ぐため、^{キューピッド・プシケ}Cupid-Psycheと呼ばれるドラッグデリバリーシステムで標的化→投与の2ステップを踏む治療方法が存在する。

現在、このような α 線を用いた新しい副作用を低減したがん治療法の開発が進められている。

2. 第2部/核医学内用療法とは(久下)

がんの治療法は大別して手術・放射線治療・科学(薬物)療法の3つがある。「核医学内用療法とは、放射性元素を用いた薬品を服用し、内部から放射線の作用により、がんを抑制・殺傷する治療法。放射線治療と科学(薬物)療法の2つにまたがる治療方法である。手術と異なり、患者にかかる負担が比較的軽い。

透過力の高い γ 線は主に検査に、低い α ・ β 線は主に治療に用いられる。体の各部位はそれぞれ集積する物質が決まっており、ストロンチウムベースの β 線核種である⁸⁹Sr(塩化ストロンチウム)は骨を構成するカルシウムと類似した同族体であるため、骨に集まる性質を持つ。そのほか甲状腺にはヨウ素が集積するため、¹³¹I(ヨウ化ナトリウム)はパセドウ病の根治治療に役立つ。

α 線核種である²²³Ra塩化ラジウムは⁸⁹Srと同様、骨に集積するが、より影響範囲が狭く、細胞攻撃能力が高いため、治療効果が大きい。

これら標的能力と治療効果を併せ持つ核種は自然に多く存在するものではないので、化合物や分子をデザイン・開発していく必要がある。

3. 第3部/自動化装置システムについて(土屋・加藤)

研究部門の分析実験、生産工場の品質検査の現場において、人の手によって行っていた動作を代理する多関節アームロボットを使ったシステムを導入することでコストを低減し生産性を向上させる企業が増えてきている。

α 線核種である ^{211}At （アスタチン）の精製においても、生産性向上に加え、作業安全の観点からもロボットシステムの活用が期待されている。

4. 第4部／がんを治す新しい放射線治療（RI）内用療法の開発（織内）

国立がん研究センターの調べ（2010年）では、男性の60%、女性の45%が生涯のうち1度はがんに罹患するとされている。

放射性同位体（RI）はがん治療、診断、医学研究に役立つ。SPECT（スペクト）は微量の放射線医薬品を服用し、体外で放射能を測定することで代謝情報を含む患部の画像を撮影することができる。

治療効果を持つRIの服用による治療である甲状腺がんのRI内用療法は、手法そのものとしては増加傾向にあるものの、治療受診までの待機時間が増加傾向にあり、同時に長期の待機案件は予後不良の可能性が高くなっている。

福島県立医大では放射性同位体製造のための粒子加速器（サイクロトロン）を小型・中型の2台所有し、特に α 線核種を製造可能な中型は大学病院としては日本唯一。今後はRI治療薬の研究開発拠点をめざし取り組む。

2 クロージング(まとめ)

日本における放射線治療の規制は厳しく、ドラッグデリバリーシステムのほうが、医薬品開発に比べ進んでいる状態。近年利用が可能となった α 線核種にはがんに対する効果的な治療薬となりうるポテンシャルがあるため、今後被災地である広野・福島を活動の中心として、研究を進めていく意義がある。

本セッションの開催を通して、がん治療のあらたな選択肢としてのRI内服療法を周知することが出来た。

◎セッション8

われわれの復興とは何か？ ～6年半の経過から復興について考える～

日時	平成29年10月15日(金) 13:00～14:30
場所	広野町中央体育館(ミーティングルーム)
コーディネーター	高木 亨(熊本学園大学)
パネリスト	本多 環(うつくしまふくしま未来支援センター) 坪井 真喜(うつくしまふくしま未来支援センター) 飯島 洋一(広野町職員)
参加者	20名



1 概要

1. 第1部／各パネリストの復興像

(本多) 被災時は福島県内小学校の少人数支援室で働いていた。復興と一言にいつても、福島住民として・教員として・外部からみた復興がある。今回は子供支援者としての復興を語る。

南相馬市の津波被災の子供はショックから難聴に。いわき市で被災した子供は一時、話すこともできず特別支援学校という選択も考えた。また、避難地域では元気だった子供が地元に戻ってきて不登校になり自傷

に至るケースもあった。子供たちは被災と環境の変化により不安・ストレスを感じ変化してきた。逆にそれらに立ち向かおうとする子供もいる。そういった意味で彼らの支援＝復興に終わりはないと考える。

(坪井) 3つの視点から復興について述べる。福島で暮らす生活者＝私としては、普通に暮らすようになり、復興を意識しなくなってきた。支援者の視点から見ると、他者の描く復興の図を叶えていくことが復興である。福島あるいは地域から離れることを決めた人たちについても、伝えられるものがあると思っている。いつか戻れる日のための地域づくりと、その発信を魅せる復興としてとらえている。

(飯島) 行政側の立場から復興について語りたい。帰町率の数字、当初は全く気にしていなかった。元が5000の小さな町。無理をするのではなく、戻れる環境を徐々に築いてきた。

復興という言葉が嫌いという人もいる。復興が進んだとしても元の広野町には戻らないだろう。それでも町の魅力を出せるような形で町づくりに取り組みたいと考える。

復興は様々な価値観のもとに判断されるべきだと考える。

2. 第2部／各パネラーの話を聴いて

- ・復興とは元に戻るのではなく、一人ひとりが強く賢くなることだ
- ・最近では復興といわないようにしている（被災地からの脱却）自治体もある。人任せではいけない。
- ・県民の権利意識からの脱却
- ・幼・小・中・高すべてが戻ってくるのが復興だ
→達成のためには復興だけでなく振興で考えなければいけない。アピールポイントが必要。
- ・町の魅力で新しい人が住み始めれば復興が終わりか？

2 クロージング(まとめ)

震災は何を奪い、これから何を創ることが復興になるのか。1つの意見として、安心できる場を構築することが「復興」ではないか。震災が悪影響としてないことが1つのゴールだ。

被災からの6年とこれからの復興の道のりは、記録に残す・ことばで伝えるといった努力で忘却とならないようにしなければならない。

今後の課題として「被災者とは」について語っていく必要があるかもしれない。

◎セッション9・10

未来創造探究 研究発表・演劇『あのひ、隠れたひ』

日時 平成29年10月15日(日)13:00～16:00

場所 広野町公民館(大会議室)

コーディネーター 佐藤 伸郎(ふたば未来学園高)

発表者 ふたば未来学園3年未来創造探究各班・
ふたば未来学園高等学校演劇部

参加者 70名



1 概要

1. 第1部／未来創造探究発表

本校の2・3年生は、企業・大学・NPOと連携しながら地域再生の実践と探究を行っている。6つの探究班に分かれて活動をしているそれぞれの活動内容と町への提言を行った。

(1) 福祉と健康探究班

「介護士の人材育成」「東日本大震災による双葉郡の孤独死」(関根 麗楠)

(2) スポーツと健康探究班

再生可能エネルギーの発電によるアリーナを中心とした街作り(草野 陸世/前田 篤)

(3) アグリビジネス探究班

町をやまゆりでいっぱいにする活動(高野 桃夏/横澤 奈央)

地元食材で作る給食で檜葉の子供たちに笑顔を(太田 湧慎/鈴木 勝也)

(4) 再生可能エネルギー探究班

振動発電、パッシブハウス、植物発電を通して、望ましい人間社会と持続可能な地球環境やエネルギーの関連性についての探究(木村 知宙/高橋 彩花)

(5) メディア・コミュニケーション探究班

Twitterによる情報の分析と発信・動画による情報発信を通して、情報が社会に与える影響、風評や風化のメカニズムの探究(根本 陽大)

(6) 原子力防災探究班

FM(ファーマーズマーケット)ふたばプロジェクト

農業を用いた街づくり、新たな社会システムの創造、失われたコミュニティの再構築などの模索(松本 彩華)

2. 第2部／演劇「あのひ、隠れたひ」

演劇部による創作演劇をおこなった。完成したばかりの新作で初公演であったが、震災いじめをリアルに表現したものであり、差別や偏見を真剣に考えさせられる作品であった。

2 クロージング(まとめ)

生徒たちの学びの発表の良い場となった。公民館1階では、アグリビジネス探究班広野チームが、広野町の町花であるヤマユリの球根を無料配布し、参加者から励ましの言葉をいただいた。

駐車場では、農業選択者が、自分たちで作ったハンバーガーを販売し、短時間で完売した。商業選択者は、浜通りの高校生が作ったお菓子や大熊町の農家が育てた梨を販売した。

今後、環境防災課と協働して、町の防災やコミュニティ形成について活動したり、復興企画課に地方創生に関する政策アイデアを提言したりと、セッションを通して行政との連携を強める機会を得られた。

サイドイベント

◎広野町映像作品放映

日時	平成29年10月12日(金)、 13日(土)、15日(日)
場所	広野町公民館(研修室1)
製作者	広野中学1年生、 クリエイティブサマーキャンプ参加者一同



1 広野中学校映像教育作品放映

1. 概要

メディアに正しく接する「メディアリテラシー」と、活動を通じた「地域理解」の習得をめざし、広野中学1年生が映像制作を行った。その成果である作品を放映した。

2 クリエイティブサマーキャンプ

1. 概要

29歳以下の若手クリエイターが相双地方(川内・広野・南相馬)に宿泊し、体験を通じて感じた思いをもとに30秒程度の地域CMを作成した。その作品を放映した。

2. 作品

広野町の5作品を含めた全作品については、YouTubeでいつでもご覧になることができます。

◎広野町の放射線情報

日時	平成29年10月12日(金)、 13日(土)、15日(日)
場所	広野町公民館(研修室1)
主催者	広野町役場(健康福祉課 放射線相談室)



1. 概要

放射線に対する知識の涵養と来場者への情報発信のため、広野町の放射線情報に関するパネルを展示したほか、「放射線相談室だより」など関連冊子を配布した。

◎恐竜化石展示

日時	常設
場所	広野町公民館 (エントランス)
主催者	広野町教育委員会



1. 概要

広野町は、白亜紀後期(8000万年前)の地層を持ち、草食恐竜であるハドロサウルス類の恐竜(通称:ヒロノリュウ)の一部が出土した町である。町役場のエントランスには同じハドロサウルス類であるチンタオサウルスの全身骨格模型を展示するなど、恐竜の存在を通じて町をPRしている。

今回のフォーラムでは、町が所蔵している化石を公民館エントランスにて展示したほか、チンタオサウルス復元までの映像を放映した。

◎ふたば未来学園高等学校 農業・商業実習販売

日時	平成29年10月15日(日)
場所	広野町公民館前
主催者	ふたば未来学園2年生 (スペシャリスト系列)



1. 概要

広野町の「ふたば未来学園高等学校」では、スペシャリスト系列カリキュラムの生徒が2年次より工業・農業・商業・福祉の4分野に分かれ、相双地域を舞台に、それぞれ実践的な学びを行っている。

本フォーラムでは、農業グループが手作りのハンバーガーを販売したほか、町花であるヤマユリの配布を行った。商業グループは大熊町の農家が育てた梨や、浜通りの高校生が作った焼き菓子等を販売した。

交流イベント

◎呈茶席

日時	平成29年10月12日(木)
場所	広野町公民館エントランス
担当者	猪狩 宗成ほか14名



1. 概要

フォーラムに参加いただいた方々をもてなすため、町内の文化団体である広野町裏千家同門の方々がお茶と生菓子を振舞った。

◎福祉施設 食品販売

日時	平成29年10月13日(金)、14日(土)
場所	広野町公民館エントランス
主催者	いわき学園有志、ワークセンターさくら有志

◎健康食 じゅうねんうどん試食会

日時	平成29年10月15日(日)
場所	広野町公民館前
担当・協力者	町民(広野町婦人会)、 広野町役場(復興企画課)、 応援職員



1. 概要

福島県の郷土料理「じゅうねんうどん」はエゴマと砂糖、味噌で作ったタレにうどんをつけて食べる。地元の味に来場者と町民が老若男女を問わず舌鼓を打った。



ふくしまから
はじめよう。

Future From Fukushima.



第4回 国際フォーラム

～食べて、歌って、話し合う、ひろのいろいろ会議～

「被災地からのメッセージ」[報告書]

International Forum “Message from Disaster Affectd Areas”



□編集・発行／広野町復興企画課

<http://www.town.hirono.fukushima.jp/>

